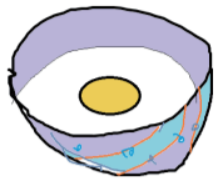


■今月の特選句



金城正則

吉野家の卵かけごはんも寒卵

吉野家の卵かけごはんも寒卵

金城正則

寒卵は栄養価が高い。寒の内に採卵されたものはすべて寒卵。吉野家の卵も当然、寒卵である。しかもお値段そのまま。俳人だから価値が分かる。



八塚一青

春寒しロールケーキに巻かれない

春寒しロールケーキに巻かれない

八塚一青

ふわふわのスポンジとホイップクリームを見て、美味しそうと思うのは普通の人。もぐり込めるなら暖かそうだと感じるのが、一流の滑稽俳人。



ほりもとちか

春の猫

可愛いと褒めれば欠伸

可愛いと褒めれば欠伸の猫

ほりもとちか

褒められ慣れている猫だね。「知ってるけど、だから何よ」と言わんばかりの欠伸。愛されていることはわかるらしい。人間の苦勞も知らず春の猫。

■今月の特選句



盆栽も爺もひねくれ去年今年

南とんぼ

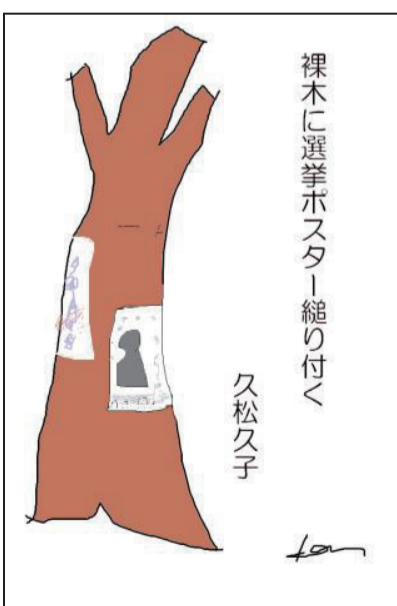
盆栽は日本文化を象徴するものの一つ。樹形でいかに自然の歳月を再現できるかが技である。爺さんも時間をかけて個性ができあがったんじゃ。



大根が幅を利かせてみるおでん

山本 賜

はんぺんが膨らんでみせても大根の存在感にはかなわんね。「幅を利かせてみる」のは大きいからでもあるが、やはり人気があるからである。



裸木に選挙ポスター貼り付く

久松久子

おそらくは落選候補者のポスターだろう。何処からか剥がれて飛んできたのかもしれない。本人の必死さと重なるね。応援したいが裸木は迷惑顔。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

平成も明治も遠き積もる雪 ・・・積もつては溶け積もつては溶け	谷本 宴
人の上人を作れりボーナス日 ・・・ボーナス無いが俳句作れり	北熊紀生
かんらから御身揺らして山笑ふ ・・・花粉はあまりこぼさぬように	西野周次
アミダくじどの道行くか卒業生 ・・・運の見極め授業で習はず	青木輝子
恵方巻食べそこないて豆を噛む ・・・鬼も怖がる丈夫な歯をもち	相原共良
着膨れに南極行くのかと笑はれて ・・・この寒さこそ難局ならむ	伊藤浩睦
シャッターに収まる人生風光る ・・・収まりきらない思ひは俳句に	稲葉純子
目の中の言葉を交わすマスクかな ・・・口で言ふより本音がちらり	久我正明
霜柱踏んで確かむ骨密度 ・・・霜の柱にやまだまだ負けぬ	工藤泰子
だんだんと仏の顔に日向ぼこ ・・・うつかりあの世に行きさうになり	白井道義
足あとは鼠小僧か雪明り ・・・義賊が何か届けてくれたか	高田敏男
鯛焼を三宝にのせ神棚へ ・・・尾頭つきに違いなけれど	田村米生
楽じやないけど楽しい暮らし福寿草 ・・・楽で苦しいよりはいいかも	浜田イツミ

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

肩と腰膝も癒えよと四温の湯	相原共良
着流して春の隣へ道後の湯	相原共良
カルチャーで心身再生返り花	青木輝子
合格の恩塾にある受験生	青木輝子
鯨幕張り正月を控へ目に	赤瀬川至安
雪女郎湯上り肌は面ど臭い	赤瀬川至安
大寒や呂律回らぬられるりれろ	赤瀬川至安
ぼたん雪背なだけみせてふりむかず	井口夏子
雪中に乳房二つを置いて行く	井口夏子
眉の濃き過去の人似の雪だるま	井口夏子
一鶏病んで一千万羽のお弔い	池田亮二
天下晴れて新成人の千鳥足	池田亮二
居座りて散歩を阻む大寒波	石塚柚彩
蹲(つくばい)の薄氷にある穴ひとつ	石塚柚彩
十年に一度の寒波と云ふ寒波	石塚柚彩
午前七時一年ぶりの初日の出	伊藤浩睦
年の瀬に防犯カメラ盗まれて	伊藤浩睦
冬帽子雪かぶりたる伊吹山	稲沢進一
冬桜何も語らず美しく	稲沢進一
大根の一打空振り三振す	稲沢進一
朝毎に水軽くなり春兆し	稲葉純子
バレンタインや百均の愛お手軽に	稲葉純子
善哉に誘はれ集う女正月	井野ひろみ
霜柱シャキッと踏んでドキッとし	井野ひろみ
ぎりぎりの期限の卵おでんの具	井野ひろみ
電線に気を使いつつ凧揚がる	上山美穂
首肩をぎゅっと縮める余寒かな	上山美穂
ブラインドの隙間に覗く寒の明	上山美穂
リビングにミモザ飾りて春を待つ	梅野光子
もらひしは新型コロナてふお年玉	梅野光子
お婆ちゃんババヌキに勝ちお元日	梅野光子
太ったねと反則級の春来たる	遠藤真太郎
陽炎の街にくつきり永田町	遠藤真太郎
斑雪平和を目指す難しさ	遠藤真太郎
白梅の大木一本市役所前	大林和代
百年を吹かれ続けて枯尾花	大林和代
捨てられしマスクは春の土の上	大林和代

初場所や大関意地のすくひ投げ	小笠原満喜恵
節分会コロナの鬼へ豆を撃つ	小笠原満喜恵
寒稽古気迫の素足赤くなり	小笠原満喜恵
牡丹の芽に負けてはおれぬ七十一歳	岡田廣江
どれも誠実すみれ科のすみれたち	岡田廣江
初蝶の衝突回避の高感度	岡田廣江
春時雨小寺の屋根を濡らしきる	門屋 定
通院の雨に濡れての余寒かな	門屋 定
水仙の群生見つめ雨の中	門屋 定
幸せは何故(なにゆえ)青か瑠璃鶉(びたき)	北熊紀生
ふきのとう懐かしいのはにがさだけ	木村 浩
ふきのとう一つの花と見えていた	木村 浩
寒卵と酒一杯の風邪治療	金城正則
いみじくもなめくじなりてじくじたる	金城正則
裸木は脱いで脱いで脱ぎまくる	久我正明
つけたい派つけない派マスクにも	久我正明
狛犬の尾は渦を巻き日脚伸ぶ	工藤泰子
蠟梅は開ききりたる溶けてある	工藤泰子
福豆がこんな所に転がって	桑田愛子
なんとこのう空けてある席日向ぼこ	桑田愛子
寄り添うや雛の寂しくないやうに	桑田愛子
華やぐを好む古木の返り花	壽命秀次
塗る叩く鏡睨んで初化粧	壽命秀次
腹黒と噂の館梅白し	壽命秀次
へたな嘘ついで言ひ訳息白し	白井道義
もしかして寝たふりならむ浮寝鳥	白井道義
サッカーの少年靴も宙を飛ぶ	鈴鹿洋子
犯人は猫春泥の足の跡	鈴鹿洋子
ラグビーの前へ前へと猿団子	鈴鹿洋子
「息吸って止める」検診車に置いてきた	鈴木和枝
只今冬眠中大根静かに静かに	鈴木和枝
蒔いても全てが発芽しない	鈴木和枝
もう止める言ひつつ今日の初句会	高須賀溪山
大寒や乾布摩擦をしてみたり	高須賀溪山
猪肉や少し歪みし鍋に入れ	高須賀溪山
樹木医に点滴うたれ老桜	高田敏男
午前様誤解のはての絵踏かな	高田敏男

騙し舟掴みし信者春未だ

喧嘩にも返し技持つ燕かな

三重苦耐ゆる喉(のんど)や花粉症

寒邪から吾のみ狙ひ打ちをされ

冬登山背なのリュックにレモン入れ

音楽の種も眠るや冬の山

鳥肌をさする仁王に春の雪

蒲公英の数えきれない羊飼

雨水にすつきり顔の露の臺

春近しワクワドキンポヨヨンポ

見て見てよベテルギウスの瞬きを

マフラーでほっかむりする散歩かな

エアコンの疲労困憊する寒さ

ゴミ出しの日だと知らせる寒鴉

寒雀赤信号に休みをり

焼芋屋の前に十字路右左

厳寒の来て玄関で身の縮む

口あけて泣いているごと靴(あかぎれ)は

鮪の中落ちほっぺたも急降下

節分は恵方巻より豆をまけ

遠き友ミカンとリンゴのお付き合い

忘れても予備のマスクがポケットに

猫柳光と戯れ喉鳴らす

アルバムにめぐる思い出春の昼

公魚のひきのピピピと濡れた手に

脆弱な日本列島春の地震(ない)

ひらひらと舞ふ象の耳木の芽風

街角は追はれし鬼で密となり

招かれた福で密なる2DK

鬼と福の密を薄めるビールかな

幸福が飛んでゐるやう胡蝶蘭

年玉を胸に跳ねたる昔むかし

女正月ストレスなしの独り膳

当選は僧侶からの年賀はがき

春めくや大あくびする猫のゐて

ランチしてショッピングして春の服

成人日晴着にマスクしてゐたる

竹下和宏

竹下和宏

竹下和宏

田中 勇

田中 勇

田中 勇

田中やすあき

田中やすあき

田中やすあき

谷本 宴

谷本 宴

田村米生

田村米生

月城花風

月城花風

月城花風

土屋泰山

土屋泰山

土屋泰山

鶴井啓司

鶴井啓司

鶴井啓司

長井知則

長井知則

長井知則

西野周次

西野周次

花岡直樹

花岡直樹

花岡直樹

浜田イツミ

浜田イツミ

久松久子

久松久子

日根野聖子

日根野聖子

日根野聖子

冬入日我が頬叩く引っ張たく	細川岩男
受験生神よ仏よ運任せ	細川岩男
内裏雛鎮座まし坐す古ピアノ	細川岩男
初空やあの世の吾子はあの辺り	ほりもとちか
生きをればどんなおつさん明けの春	ほりもとちか
賀状仕舞のつもりが増えた年賀状	南とんぼ
今年から賽の目に切る雑煮餅	南とんぼ
豆打や居座る鬼が打ち返す	峰崎成規
噂せば蛤ぱつと口開く	峰崎成規
錠剤の色また増えて余寒なほ	峰崎成規
告口のやうな入口春隣	椋本望生
逃げ足が速い初夢の大吉は	椋本望生
胡坐よりのつと振り向く猫の夫	椋本望生
人の性知り尽くしたる嫁が君	村松道夫
獅子舞の頭ふりふり次の家へ	村松道夫
咳一つ残して父は床につく	村松道夫
おそらからころがりおちたあられだま	森岡香代子
剪定の軽ろきリズムも伐りすぎて	森岡香代子
本物のガラスのふりの薄氷	森岡香代子
流氷のテレビ中継春を告ぐ	八木 健
焼肉を食らひ二ん月乗り切らむ	八木 健
外泊の理由を問はれうかれ猫	八木 健
立春と言った者から勝つてゆく	八塚一青
雉鳴いてまた雉鳴いて休園日	八塚一青
霜柱踏まれてなほも立ち上がり	柳 紅生
トンネルを抜け雪山のリバーシブル	柳 紅生
野火走り写楽顔へと豹変す	柳 紅生
古木折れ雪の白さを恨みけり	柳村光寛
雪折れの栗の享年知る年輪	柳村光寛
セーターの穴から受ける憂き世風	柳村光寛
セーターをこわごわ脱がせる静電気	山内 更
四十五の十分過ぎる年の豆	山内 更
グリーンのパーカーパンツ春を待つ	山内 更
春の野をびよんびよん跳びたい兔年	山岡純子
早春への扉のごとく絵本開け	山岡純子
冬ぬくしエルビスの歌にフォーリン・ラブ	山岡純子

森眠る城はいばらに守られて
着ぶくれて動かざること不動明王
蓑虫になりきる落葉にもぐりこみ
大根は圧力鍋にゆだねけり
人のためいえいえ自分に小豆粥
どことなく孫に似ている女雛かな
焙烙で豆炒る音に鬼逃げる
仏壇の夫にバレンタインのチョコ
悴んだ体湯船にほどかれる
つついては辺り気づかうめじろかな
恵方とは知らぬ存ぜぬ恵方巻
手土産は泥つき葉つきのお大根
またひとつ減り軒下の吊し柿
たどり着く米寿の春の滑稽に
茶のかおり本音引き出す苦労人
踏み抜いて気づくデージーいくさ跡
いくらかは残し置きたき今朝の雪
ギーギケキョ一月尽の鶯は
影踏みの子を遊ばせてみる冬日
白梅凜凜花びらそよがせて
侘助と内緒話に花が咲く
風花に恋の残像有りや無し
体重は怖しと乗れぬ女正月

山下正純
山下正純
山下正純
山本 賜
山本 賜
弓達美沙子
弓達美沙子
弓達美沙子
横山洋子
横山洋子
横山洋子
吉川正紀子
吉川正紀子
吉川正紀子
吉原瑞雲
吉原瑞雲
吉原瑞雲
渡部美香
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子
和田のり子